

# ウルフの語らない空間

## —『歲月』におけるユダヤ人像—

野村 京子

### 1. はじめに

1937年に出版されたヴァージニア・ウルフの『歲月』(原題: *The Years*)は、イギリス中産階級に属するパージター一家三代の変遷を描いた歴史物語、いわゆる「サーガ」(家族年代記)の系譜に入る作品である。しかし、この小説を「サーガ」と呼ぶにはいささか問題がある。全体的に、『歲月』は「サーガ」の重要な要素である統一性に欠ける。その主な理由は、1880年から1932年に至る半世紀の家族の歴史的推移が一貫した視線からでなく、登場人物一人一人の視線と意識から非連続的に描かれているので、中心テーマがどこにあるのか見つけにくいことにある。さらに、もうひとつ加えれば、物語の背景である歴史的事実がテキストの表層下に押し込められている点である。ここで注目したいことは、ふたつめの理由である。家族の歴史を語るうえで、背景となる社会的事実には欠かせない要素である。しかし、この作品のなかではそれは登場人物の言葉のなかで断片的に語られるに過ぎない。それゆえに、自分を取り巻く社会環境を非常に敏感であったウルフが、なぜイギリス社会の抱えていた現実問題を表面切って主張しないのか、という疑問が生じる。したがって、この小論では、『歲月』において、登場人物の言葉の断片に隠された事実、特に、イギリスと社会におけるユダヤ人の状況に焦点をあて、ウルフが語らない空間、言い換えれば、彼女が省略した箇所のメタファー(暗喩的な意味)を読み取ることを目的とする。

### 2. 『歲月』について

『歲月』が描く時代、19世紀末から1930年代にかけて、イギリスは内外とも激動の時代であった。国外においては、植民地支配の拡大をめぐるヨーロッパ諸国間の緊張が高まるなかで、1914年に第一次世界大戦が勃発し、その後

ファシズムの台頭、スペインの内乱と続き、『歲月』が書かれていた時は第二次大戦勃発(1939)の気運が濃くなっていた状況にあった。国内においても、経済不況による下層階級の貧困、女性解放運動や社会主義運動の激化、移民の大量入国などの社会問題が帝国主義国家イギリスを悩ませていた。一言でいえば、繁栄を謳歌したヴィクトリア朝の楽観的世相は世紀末を境に陰鬱な雰囲気へと傾く様相を呈していた。このような社会状況を反映して、ウルフは、1929年に『私だけの部屋』、1937年に『歲月』、1938年に『三ギネーズ』と相次いで作品を発表している。この三作品のうち、『私だけの部屋』は女性の自立と解放を訴え、『三ギネーズ』では、さらに強烈に、男性支配がもたらした戦争に対する抗議の態度を前面に出している。どちらもエッセイとして高い評価を勝ち得ている作品である。それに対して、『歲月』は出版当時はベストセラーになったが、今日ではウルフの作品のなかでは、最も人気がなく、評価も低い作品であるといわれている。その理由は、先に触れたように、この作品の文学ジャンルの曖昧性にある。すなわち、一家族の歴史小説の系譜に入れるには統一性と重厚さに欠けているからである。このことはこの作品の完成までの経緯に問題があったといわれる。

そもそも、『歲月』の完成には紆余曲折がある。初めは、『歲月』は『ページター家』という題名の〈エッセイ・小説〉として構想されたが、途中で変更され、最終的にエッセイの部分が省かれ、小説の部分が『歲月』の中に吸収されたということである。(ジョンソン 1998 p.5) この点に関して、吉田(1991)は、「〈エッセイ・小説〉という形式が捨てられたのは、芸術としての〈小説〉の美学と、〈エッセイ〉の分析的論理性が調和しなかったからであろう。」(p.218)と言及している。実際、ウルフは『現代小説論』(1919)の中で、同時代の大家作家であるH.G.ウェルズ、アーノルド・ベネット、ジョン・ゴールズワージーのリアリズムは、魂ではなく外面的事実の描写にすぎない、と述べ、彼等を「物質主義者」とであると痛烈に批判している。(p.87) このことから、『歲月』においては、ウルフは小説の技法として歴史的事実を前面に出して論議することを避けたかったと考えられる。しかし、だからといって、彼女が切り捨てた「事実」が作品から姿を消したことにはなっていない。作品

の背後にはイギリス社会が抱えていた社会・政治問題がメタファーとして描写されていることに注目しなければならない。すなわち、社会・政治問題は会話の中の一断片としてしか表現されていないが、そのモザイク的断片を繋ぎあわせると一つのメタファーとして意味をなすようになっている。具体的にいえば、メタファーを通して、ページター一家三代とその時代の歴史的、社会的記録として読めるのである。それゆえに、ウルフがあえて核心に触れず、曖昧性をとどめたのは意図的としか思われぬ。キャシー・J. フィリップ(1994)の論はこれを裏付けてくれる。

『歳月』のなかで、ウルフは疎外された者たち、すなわち、女性、同性愛者、召使、植民地の人々の間に存在する繋がりを示している。しかしながら、登場人物はこの重要な話題について議論することをしない。(p.28) (筆者訳)

では、ウルフの意図したこと、すなわち、あえてイギリス社会の裏面に潜む真実を語ろうとしないのはなぜなのか。それは彼女が固執する小説の技法と深い関連があると思われる。すなわち、モダニズムの作家として、社会・政治問題をどのように扱わなければならないかという問題に関わることもある。また、これはイギリス帝国主義と文学との関連へと広がる問題でもある。この点について、エドワード・W. サイドの論を参考にしたい。彼は『文化と帝国主義』(1998)の中で、帝国主義に追従するイギリス小説と批評家を激しく批判している。その主旨は次のようである。

帝国は、19世紀の大半において、ヨーロッパの小説(特にイギリス小説)のなかで、暗号化された存在となって機能する。そのため、底辺の人々、帝国の経済や政治が依存した人々の現実の姿は歴史的にも文化的にも関心をひくことはない。多くの批評家もまた帝国主義を無視している。要は、帝国主義のプロセスと、帝国主義への抵抗のプロセスの両方を考慮し、テキストから強制的に作者が排除しているものを読むことである。個々の文化的作品は、ある一瞬のヴィジョンであり、読み手はこのヴィジョンが喚起する再ヴィジョンと対置する必要がある。(p.131-138)

パレスチナ人であるサイドはイギリス文学の背景に帝国主義の侵略と搾

取の物語があることを鋭く指摘し、同時に、読み手側の注意を促す。この見解は『歲月』の解釈に大きな手掛かりを与えるものである。女性解放と反戦を訴えるウルフが、帝国主義的動向に対して批判的であったことは当然であるが、一方で、豊かな知識階級としてその恩恵を受けていたことも事実である。その矛盾をウルフはこの小説の人物を通して語らせようとする。自分の政治的、社会的意見を表面に押し出さず、作中人物の異なる視点から「事実」を断片的、暗喩的に語らせる。サイドが指摘するように、『歲月』においては、「帝国主義」が底流にあり、暗号として各人物の意識のなか機能している。ゆえに、作者が排除した部分を読者はイメージ化して、再ヴィジョンを作り上げることができるのである。さらにこのような読み方、「ヴィジョンの再構築」こそウルフが読者に要求したものではないだろうか。この意味で、『歲月』は従来の家族の歴史小説と異なる新しさがあると思われる。

### 3. イギリスのユダヤ移民

では、具体的に『歲月』の中で描かれるユダヤ人を検討する前に、イギリスにおけるユダヤ人の立場を見てみたい。

ユダヤ人のイギリス移住は、1066年のノルマン征服に始まったといわれている。それ以後のイギリス社会におけるユダヤ人像は時代の変遷とともに変容する。近世におけるユダヤ人像は文学作品のなかで見ることができる。特に、ユダヤ人に対する差別や偏見に満ちた言説はその時代のユダヤ人観を反映している。たとえば、シェークスピアは『ベニスの商人』の主人公シャイロックを「冷酷・強欲な金貸し」に描くことで、当時の人々の反ユダヤ人感情を露にしている。しかし、17世紀後半から裕福なユダヤ人は王室と経済的に結びつくことで、地位を築き、必然的にキリスト教に改宗するものが増えていく。以後、ユダヤ人はイギリス社会に同化する傾向を見せ、イギリス人としての社会的立場を認められるようになっていく。ウルフの夫であるレイナード・ウルフはこの係累に属するユダヤ人の子孫である。ただし、ここで問題として取り上げるユダヤ人はこのような裕福なイギリス系ユダヤ人の子孫ではなく、新たに東ヨーロッパから移住したユダヤ人である。

東欧ユダヤ人のイギリスへの大量移入は、1881年ロシアの「ポグロム」(ユダヤ人に対する襲撃)以後拍車がかかり、10万から20万人ともいわれるユダヤ人がロンドンのイースト・エンドに集中し、大規模な移住区、いわゆる「ゲットー」を造った。それはイースト・エンドの中でも異質な社会で、彼等独自の文化に彩られた、文字どおりの外国を出現させた。(松浦 2000 p.33-40) こうした背景には、迫害から逃れ、他国での苛酷な生活を強いられたユダヤ移民たちは、同族意識を強化することで協力していかなければならない必然性があったのである。しかし、そのようなかれらの団結心がイギリス社会においては歓迎されないものになっていくこともまた必然的であった。というのも、従来のイギリス系ユダヤ人がイギリス文化と融合しようとしたのに対して、ゲットーのユダヤ人は、「自分たちを〈自己〉に属するグループ、他はすべて〈他者〉に属するグループであると見なしたのである。」(モダー 1960 p.333) 当然なことに、自己と他者を差異化するユダヤ人に対するイギリス人の反応はユダヤ人のそれと相対するものである。

松浦(2000)によると、ユダヤ移民に厳しい反応を示した者は、イースト・エンドにもとから居住する下層階級の労働者であり、理由は、イギリス国民とユダヤ人の文化的価値観の相違にあったという。それに対して、中産階級以上の支配層は、ユダヤ人が移住し始めた頃は同情の態度を示していたということである。(p.35-44) しかし、このことは支配層がユダヤ移民の文化を受け入れたことではなく、むしろ逆に、イギリス文化とユダヤ文化の乖離を意味する。すなわち、支配層にとってユダヤ移民は、イースト・エンドに住む貧民と同じく、社会的脅威の元凶か慈善の対象以外の何者でなく、自分たちの社会とは異質の社会の住民として見ていたのである。結局、このようなイギリス国民のユダヤ移民に対する反応は、帝国主義を堅持するイギリス社会体制のなかでより強化され、1905年には移民規制法が制定されることになる。では、このような背景をもとに、ウルフは『歳月』の中で、どのようなユダヤ人像を描こうとしたのか。また、そこから彼女は何を読者に伝えようとしたのか。

#### 4. 『歳月』のユダヤ人像

まず、第一章の「1880年」に描写されるユダヤ人像から見てみたい。この物語はアバコーン・テラスに住居を構えるパージター家の母親の死を迎える暗い場面から始まる。しかし、母親の死という重大な局面が近づいているにもかかわらず、家族は平常と変わらない行動をとる。父親の退職軍人アベル・パージターは、元軍人仲間の会合に出席した後、愛人の家に立ち寄る。帰宅後も、死期が迫っている妻を見舞うこともせず不機嫌の顔で食卓に座り、家長としての威厳を誇示する。次女のミリーと三女のデーリアは、パーティにどちらが出席するかで揉めている。この物語の中心人物であり、母親に代わり家を切り盛りする長女のエレナは、日頃、貧しい人々への慈善活動に積極的に参加している女性である。この日も慈善活動を終えて、帰宅したエレナは、自分の家庭の重苦しい雰囲気にならぬ耐えられず、貧しいながら懸命に生きる底辺の人達と自分の家族とを比較し、ミリーに言う。「貧しい人達のほうが私たちよりずっと楽しんでいるわ。」(p.22) ここで、エレナが吐いた言葉の意味に注目したい。

エレナが口にした「貧しい人達」とはユダヤ移民のレヴィ家を指す。レヴィ家の貧困状況はパージター家の裕福な暮らしぶりとは対照的であるが、ひとつだけ同じ事態に直面している。それは母親の死を待つ状況にあることである。レヴィ家の母親も癌で死を待つ床に伏している。だが、そのような悲惨な生活のなかでも、明るさがあるとエレナは感じる。娘のリリーは、仕立て屋に奉公しながら、母親を必死で看病する。エレナはリリーが身に飾るまがい物の大きな真珠の「輝く光」に強い印象をうけ、また彼女の「赤い頬」を美しいと思う。彼女のこのような思いはパージター家とレヴィ家の比較から生じたことにまちがいない。典型的な中産階級に属する自分の家庭は裕福であるが、そこは権威的な父親が支配し、その庇護のもとでひっそりと生きてきた母親が瀕死の身であり、妹たちは自分勝手な振る舞いをしている。しかしながら、エレナのこのような思いをウルフは声高に言うことはしないし、また父親や家族の態度を非難することもしない。エレナの意識を通して、読者に伝えようとしていることは真珠の「輝き」の意味である。すなわち、そ

れは、ユダヤ移民の困窮な暮らしを強調するというよりむしろ、彼等の明るさを失わない、自由で、逞しい生き方への共感を示唆している。エレナが口に出さない思い、「私たちは大概家に引っ込んでいて、他の社会の人には誰とも会ったことがない。ここに閉じ込められているのだ、来る日も来る日も……」(p.23) が彼女に先の言葉をいわせたのである。彼女の意識を通して、ヴィクトリア朝の女性の立場が読み取れる。家夫長制の下で、仕事に就くことも許されず、慈善活動と結婚のみが人生であるという家庭のなかに閉じ込められた女性たちの姿、すなわち、母親、自分、そして妹たちを含む中産階級の女性がいかに抑圧されているかという事実が窺われる。したがって、真珠の「輝き」は、二重の意味を持つ。一方では、ユダヤ移民の貧困さと自由を、もう一方では、中産階級女性の抑圧を暗示しているのである。

次に、「現在」の章におけるユダヤ人の描写を見てみよう。時代は1930年代で、前述したように、イギリス社会が下降線を辿っている時代である。場面はエレナの姪にあたるセアラの部屋である。彼女の従兄弟ノースとの間に交わされる会話からこの時代のユダヤ人像を見てみよう。ノースは年老いたエレナからのセアラをパーティに招待したという意向を伝えに来た。話しの途中で、ノースは部屋の外の物音が気になり、不審に思う。その後の二人の会話は同じアパートに住むユダヤ人を中心に展開する。

「ユダヤ人よ」とセアラは呟いた。

「ユダヤ人？」と彼は言った。

その音はかなりはっきりと聞こえるようになった。誰かが風呂の栓をひねり、向かいの部屋で入浴しているのだ。

「ユダヤ人が風呂を使っているの」

「ユダヤ人が風呂を使っている？」と彼は同じことを繰り返した。

「多分、明日になると浴槽のまわりに脂の後がついているわ」

「ユダヤ人め！」

見も知らぬ男の身体の脂が隣の浴室を汚していることを考えると彼はむなくそが悪くなった。二人は水の流れる音に耳をかたむけた。

「あのユダヤの男は何者なんだい？」

「エイブラハムスンよ、獣脂商よ」

薄い壁ごしに水の音は以前より手にとるように聞こえる。

「しかも、彼は浴槽のなかに髪の毛を浮いたままにしておくの」

ノースは全身に悪寒が走るのを感じた。食べ物の中の髪の毛、浴槽に浮かぶ髪の毛。他人の髪の毛は、思っただけで気分が悪くなった。

「君はあいつと同じ風呂に入るのかい？」彼女は頷いた。

ノースは不快に「チェ！」と音をたてた。(p.248-249) (筆者訳)

この会話から、一部の中産階級イギリス人が彼等によどのような視線を向けていたかが窺われる。隣の浴室からの水音やユダヤ男性の物音を伝える薄い壁は、セアラの貧しい生活環境を物語り、彼女の落ちぶれた境遇を示唆する。しかし、それ以上にこの会話からは反ユダヤ感情が感じられる。繰り返し発せられる「ユダヤ人」は、話しの人物を非人格化しようとする意図がある。当のユダヤ男性は、アブラハムソンという名前を持つひとりの人間とは見なされず、総称としての「ユダヤ人」なのである。その男の姿、顔は壁の向こう側にあり、セアラとノースからは直接見ることはない。男の空間が壁に仕切られていることは、男がイギリス社会と異質の社会に住む人間であり、彼等とは直接交流がないことを意味する。それにもかかわらず、その男の身体に染み付いている「脂」や「髪の毛」は二人にとって、身体にまわりつく汚物として感じられる。それはまたユダヤ人とその文化を「異文化」として排除するイギリス人の差別と偏見に他ならない。

さらに、この会話からはもうひとつの側面が注目される。それはユダヤ文化に対する脅威である。没落したとはいえ、中産階級の出であるセアラが、ユダヤ人と同じアパートに住み、同じ浴室を使用することは、単に彼女の貧困を物語るだけでなく、ロンドンの貧困地帯では、イギリス人とユダヤ人が混じりあって生活しなければならない現状を伝える。そのような生活状況がイギリス人とユダヤ人との間に摩擦と軋轢を生むことは必然的である。この会話に続く描写はそれを暗示している。ユダヤ男性が入浴を終えた後も、「水道の水はうつろな音を出し、その流れる水の音を除いて、家のなかは全く静寂となった。」(p.251) この描写は単なる状況描写ではない。前述の会話の続



きとして、ウルフがメタファーとして表現しようとしていることはあきらかである。つまり、「静寂」は伝統的なイギリス社会を、「水の音」はそこに侵入し、社会秩序を乱すユダヤ文化を暗喩しているのである。

## 5. おわりに

以上のテキストから、ユダヤ人に関する二つのエピソードを分析すると、作者ウルフの主張が前面に出されていないことが分かる。最初にのべたように、彼女が自分の主張を意図的に回避した理由はいろいろあるが、そのひとつは、直接的、断定的な論議より、会話や心理・状況描写から読み手がイメージを喚起することを意図したと思われる。また同時に、この時代のユダヤ移民に対するイギリス人の反応を、作者の視点からでなく、登場人物の視点から描きたかったと思われる。そのような視点こそその時代の人々の異文化観を反映したものなのである。ふたつのエピソードのうち、ひとつめのエレナとミリーの会話からは、ユダヤ移民の貧しさのなかにある自由と家庭的あたたかさ、それと対照的に、ヴィクトリア朝の家父長制と抑圧された女性の姿が垣間見られる。また、ふたつめのエピソードのノースとセアラの会話からは、第二次世界大戦前のイギリス社会におけるユダヤ人の状況と彼等に対するイギリス人の反ユダヤ感情が見いだされる。ウルフは、短い会話と描写から、メタファーを機能させることで、読者のヴィジョンを再生することに成功している。このことによってステレオタイプなユダヤ人像ではなく、この時代に生きたユダヤ人像が「歳月」のなかで描かれ、時代を越えて今日でも読者に「事実」として伝わるのである。

### 引用・参考文献

- Johnson, Jeri (1998). "Introduction" in *The Years*. London: Penguin Books. pp.5
- Modder, Montagu Frank (1960). *The Jew in the Literature of England*. New York: Meridian Books. pp.33
- Phillips, Kathy J (1994). *Virginia Woolf against Empire*. Knoxville: Tennessee UP. pp.28
- Woolf, Virginia (1998). *The Years*. London: Penguin Books.

Woolf, Virginia (1972). "Modern Fiction" in *20th Century Literary-Criticism*. Ed. David Lodge.

Essex: Longman, 1972. pp.87

エドワード・W・サイード(1998)『文化と帝国主義』大橋洋一訳 みすず書房 pp.131-138

河野 徹(2001)『英米文学のなかのユダヤ人』みすず書房

坂本公延(1978)『ヴァージニア・ウルフ小説の秘密』研究社

橋口 稔(1989)『ブルームズベリー・グループ』中央公論社

松浦京子(2000)「イースト・エンドと東欧ユダヤ移民」

『周縁からのまなざし』川北稔編 山川出版 pp.33-44

吉田良夫(1991)『ヴァージニア・ウルフ論』葦書房

(のむら きょうこ)